2020年06月02日 新潟日報 朝刊 広告１面 017頁

(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

未来のチカラ in 上越
つなぐ つたえる つかえる
新潟日報

挑め、上越。

Joetsu Challenger's INTERVIEW
上越チャレンジャーズインタビュー

特定非営利活動法人 女性みちみらい上越
http://www.w-joetsu.org/michimirai

#012

行政と市民の間で、地域の未来をつくる。

特定非営利活動法人「女性みちみらい上越」理事長

野本（もと） 幸（みゆき） (55)

野本幸さん(55歳)は、2003年からNPO法人「女性みちみらい上越」の理事長を務め、2007年からは会社の代表としても活躍中。その会社でいろいろなNPOの事務局を引き受け、いまでは何足ものわらじを履き、笑顔と行動力で上越に新風を吹かせている。

どのお話からしたらよいのかしら。たくさんのことを手がけているので迷いますが、NPO法人の支援の原点は「女性みちみらい上越」だから、そこからお話しましょう。

私は糸魚川の能生の生まれで、父から「地域のために働きなさい」と言われて育ちました。素直に父の言う通り、20代のころから仕事をしながら、青年団の活動や若い人たちとイベントなどをして地域の活動をしてきました。30代の後半には、上越を中心に広域でまちづくりを考える「上越もんたあじゅ」という会に参画していました。そんな活動が目に留まったのか、2002年に国土交通省高田河川国道事務所(当時は建設省高田工事事務所)主催の道づくりに関する意見交換会に参加する機会に恵まれました。市民目線で「歩道が歩きにくい。ベビーカーが通りづらいから、きっと車いすの方も不便に違いない」など、普段感じていることを話しました。

そのとき、行政の方が利用者の声を求めていることがわかりました。逆に市民の人たちは意見や関わりをどうしていいかわからない、という状況も見えてきました。そこで、市民の声を行政に届け、市民自ら公共に関わり動く機会をつくりたいと思い、意見交換会の翌年、2003年にNPO法人「女性みちみらい上越」を立ち上げました。当時のメンバーの中で一番若いという理由から、37歳の私が理事長になりました。

ちょうどそのころ、糸魚川市内に地下道をつくる計画に対して、地域住民の中には防犯面から反対意見がありました。そこで、私たちは住民の方たちと一緒に考えて、防犯ブザーの設置や人を感知して音楽が流れる仕組みを提案し、住民の方の心配を取り除くことで無事に地下道を完成させました。このときに、NPO法人だからできる中間支援の必要性を実感し、いまでも大切にしています。

その後、国土交通省の取り組みである「日本風景街道」に「北アルプス塩の道」を登録しました。昔、糸魚川から松本を通り塩尻へと、海でとれた塩を牛に積んで運ぶときに使った古道があります。その古道を保存しようとさまざまな団体が活動しています。

新潟県と長野県の各自治体に約70の団体があり、私たちが一つにまとめる役割を担いました。行政の区分を超えて活動できるのも、NPO法人の強みです。

このような活動の話をすると、私自身がリーダーシップをとるタイプだと誤解されるのですが、本当はリーダーを下から支える役割が好きです。20代からずっと姉が経営する会社で働いて、いつも私は姉の後ろをついていき、姉を支える立場でした。2006年、その姉が46歳で他界してから、私の人生は大きく変わりました。姉の死に呆然としていたのですが、自分が変わらなくてはいけないという思いから、1年後にエム・コミュニケーションという会社を立ち上げました。

独立後は、広告の仕事からNPO法人を支援する仕事へと舵を切っていきました。NPO法人は設立後の継続が難しいとも言われています。事務局に専任をおくことが経費の面で厳しかったり、専門的な方たちが活動する場合、事務的な仕事が不得手で困っていたり、超多忙な方たちの集まりで事務局が不在だったりという状況を見聞きしていましたので、そのサポートをしようと思いました。

皆さんが困っているから、お引き受けしたら喜ばれると思ったのです。利益はあまり出ないので誰もやりたがらない仕事です(笑)。それでもいまではスタッフが6人になり、皆が優秀なので助かっています。現在、8つの団体の事務局業務を請け負っています。このほかに、自治体からの受託で地域を元気にするイベント業務を行っています。

地域を元気にするNPOの事務局のひとつ「上越はつらつ元気塾」は、上越教育大学と新潟県立看護大学と行政、企業、市民団体が協働し、市民に学ぶ機会を提供しています。地域の元気を探る塾を年2～3回開催し、30～80人の市民が参加しています。渡邉隆塾長の提案で昨年から「上越の未来カレンダーを作る」活動が盛り上がっています。具体的なテーマとして「子育て」と「農業」分野の人口減少とこれからの上越の未来を探るワークショップを行いました。今年も未来カレンダーを考える塾を企画していましたが、いまの社会状況的に、活動自体が来年度に延期になりそうです。

このほかに、新潟日報の小田社長が会長を務める「新潟県ウオーキング協会」の事務局もお引き受けしています。「番新しいNPO支援は、林伸彦産婦人科医が理事長の「親子の未来を支える会」です。うまれつきの病気や障がいについて、マイナス1才(うまれる前から)の医療支援や啓発を全国に展開しています。いろいろなNPOの方たちと出会い、幅広いネットワークができました。

何か困ったことが起きて相談を受けたときには、このネットワークを活かして問題を解決することができます。困っている人を助けたり、何か新しいことを始めるときに、情報やアドバイスをいただいたり、ときには得意分野での協力をお願いすることもあります。

会社を経営する苦労ですか。元々が楽天家なのでしょうね。いつも幸せな気持ちで、のんびりするように心がけています。だれでも明るい人に会ったら、気持ちがよくなるでしょう。だからいつも笑顔でいたいと思っています。

私は中学生のときに脊椎側弯症になり、新潟大学病院で手術をして2カ月間入院しました。退院後はギブスとコルセットで歩くことも難しかったので、タクシーで通学していました。いまも背骨に金属が入っているから、これ以上は太れず、腰痛が出たら危険信号なんです。入院中に同室の子が亡くなったこともあり、そのころから「命さえあれば大丈夫。あとは心配ない」と思えるようになったのかもしれません。

そんな私が思い切って活動できるのは、夫と、同居している義父母の協力のおかげです。平日も休日も、ほとんど家にいなくて、本当に不出来な嫁です。それなのに、外には「いい嫁なんだよ」って言ってくれます。とても感謝をしています。2人の子どもが高校生のときはお弁当づくりも夫がすべてやってくれました。さすがに仲間から「お前のやる仕事じゃない」と言われたみたいですけど(笑)。私の夫は女性が活躍できる、これからの時代のお手本のような人だと思います。

「頼まれたら喜んで引き受けるように」とか「常に1つのことだけでなく、新しいことをやり続けなさい」と父に言われた通りに私は働いてきました。小さいころから、両親にほめて育てられ、私が何かやると見に来てくれて具体的に「ここがよかった」と共感してくれました。父はガッツのある人で、当時は勝ち抜いて前に出るというやり方だったと思います。しかし、いまは相手を落として自分が上がる時代ではありません。私は、皆がよい結果を出せる道を見つけて行動していきたいと思っています。

私も50代半ばになり、子どもたちも家から巣立ち、社会に出ていきました。これからは若手を育てていきたいです。育てるというのは、おこがましいかな。「ヘルプ」と言われたら、いつでも応援したいし、下から支える役目をしていきたいです。

今回、上越の市議選でうれしかったのは、女性の議員さんが増えたことです。若い女性や子育て中の方が活躍すると思うとワクワクします。上越は、自ら動ける人がたくさんいる土地柄です。文句ばかり言っているのではなく、自分のやれることはやるという気質の方が多い。NPOの数も多いし、行政まかせではなく、自らが問題意識を持って動いていけます。だからコミュニティもしっかりしています。

ただ、どこの土地でも同じ傾向がありますが、自分の住んでいるところが一番大事で、ほかに目を向けないという欠点があります。広域で物事を考えると、広域のよさが見えてきて、さらに自分の足元のよさも見えてくるのです。地域にこだわるあまり、自分たちが絶対でほかを寄せつけないことは、上越に限らずどこにでもある落とし穴です。皆大事だからこそ、それぞれのよいところを取り入れながら、共存していけたらよいと思います。ですので、域外から嫁いで来られた方など、外から来た人の視点はとても貴重だと思います。ある意味、私も上越市の中では、よそ者ですし。

私たちが知らないだけで、人知れず頑張っている人がきっといるはずなので、人材の掘り起こしは必要です。田舎の悪いところで、新しいことを始めたり、出すぎたりすると叩かれちゃうこともあるから、特に女性は出すぎないようにと引いてしまうこともあるかもしれません。私ですか。私はどこかで叩かれているかもしれないけれど、それは気にしないです(笑)。

私がほめて育ててもらったように、若い人をきちんと評価してあげたいです。それには新聞の役割は大きいと思います。新潟県内に広く活動の内容を伝えることができるから。一生懸命やっていても、まわりから見て何をしているのかわからないと応援もしてもらえない。理解してくれる人がいることで、前に進むことができるんです。

私がこれから上越で育ててみたいと思うのは、フリーアナウンサーのような役割の人です。実は、以前TVのリポーターの仕事をしていたことがあるので、そのときのスキルが活かせると思います。経験は問いませんので、少しでもやってみたいと思う人がいたら、ぜひご連絡をください。

これからどんどん社会が変化して、世の中の常識も変わって、さまざまな場面で新たなニーズが出てくると思います。そのとき、誰かのお役に立つことができて、上越が少しでも元気になるのなら、喜んでどんどんお手伝いをしたいと思っています。自ら新しく動いていける予感がしますし、そんな未来がとても楽しみです。

みんながみんな元気になれる冒険できて、社会にしたい。

田中産業株式会社は、上越のさまざまな挑戦を応援します。